

おわりに

近年、大学院の重点化政策によって学生の質が大きく変化している。現在教鞭をとっている筑波大学をはじめ全国の大学の修士課程の学生数はどこも大きく増大した。各大学は様々なバックグラウンドを持った学生を受け入れつつあり、彼ら彼女らの多くは気候学、気象学などの基礎的な授業を満足に受けていない場合が多いと聞く。時代の功罪か、現在ではネット上にあるデータセットやパッケージ化された数値モデルを走らせて出てきた結果を図にすれば、体裁のよい卒論や修論を書くことができる。しかし背後に潜む物理プロセスまで思いを馳せて、本当に自然の真理を探究した研究なのか疑いたくなるような論文が粗製濫造されているのも事実で、一地方大学の教員として何とかしなければならぬという思いから、本書の上梓を思い立った。

1980年代後半から高まりを見せた地球環境問題は、21世紀に入り地球温暖化を中心として、人々に広く認識されつつある。IPCCとアル・ゴア元米国副大統領による2007年のノーベル平和賞の共同受賞は、時代の空気を端的に示している。気候変動に関する議論は、いわゆる「宇宙船地球号」の舵取りにおいて重要な位置を占めつつあることに、異論を唱える人はいないであろう。しかしながら、結論を性急に求めるあまり、プロセス研究の検証や解釈が十分でないまま、膨大な情報が一人歩きすることが多くなったように感じられる。

学生に地球温暖化研究に関して質問したところ、「すでに多くの先達の研究があり、新たな開拓領域がないのでは」というやや食傷気味の声を聞く。本当にそうであろうか。むしろ、温暖化研究によって、気候システムに内在するサブシステム間のフィードバックの理解と定量化が、待ったなしに重要な課題となりつつあるのではないだろうか。フィードバックとカタカナで書くと理解した気分になるが、実際には異なる専門分野間の壁を超えた境界領域の研究が必要となる。これは、外部資金などの謳い文句に出てくる学際分野の研究に相当し、既存の概念に縛られない若い人たちの活躍の場としても期待が高まっている。つまり、時代は、これまでのように一専門分野だけを取り扱う研究者ではなく、双方を有機的に結びつける研究者を求めている。本書によって、次世代を担う様々な学問分野の若い人たちが、地球気候システム研究の扉を開けるき

っかけになれば一大学教員として望外の喜びである。

前述のように、気候学は記述的な学問から、メカニズムに言及する気候力学へと進化を続けている。筆者の所属する気候学・気象学教室も、このような時代の流れの中で、気候学という学問体系を、地理学および地球物理学という枠組みの中で改めて見直す必要に迫られている。本書の執筆を通し、気候学がこれまでに果たしてきた役割、そして学際的な面を内包するポテンシャルにも改めて気付かされた。

執筆を開始した平成 20 年の春から約 2 年半の間に、井上知栄研究員、大庭雅道準研究員(当時)をはじめとする climate 研究室のメンバーには、議論や図の作成など、多岐に渡ってお世話になった。また、筑波大学地形学分野の松倉公憲名誉教授には、執筆すべきか迷っている時に、貴重なご助言をいただいた。筑波大学出版会の編集委員を務められている人文地理分野の田林明教授には、入稿の遅れにもかかわらず終始明るく励まして頂いた。図 3.1.1 はカルトグラファーの小崎四郎氏に作成いただいた。筑波大学出版会の安田百合氏には、脱稿から制作にかかる様々な作業に尽力していただき無事出版の運びとなった。ここに記して心より御礼申し上げたい。

平成 23 年 12 月

植田宏昭